

寄松祝

ふた葉より千代もへぬへき色みせてこゝ住よしの岸のひめ松

山路蕨

つまさこる道にもえ出るさわらひや賤山かつのなくさなるらん

後撰百人一首評釋

(奉前)

禾の舍あるじ

禎子内親王家攝津

ゆく秋のたむけの山のもみら葉は形身はかりや散り残るらん

ゆく秋のたむけしてゆくといふを、手向山に、いひかけゝるなり、手向山は大和の名所なり、山の神に、たむけ人の手向くるは、ぬさなり、すぎゆく秋の、たむくるは、もみぢなり、たむけは、ゆくをうけ、散りは、もみぢをうけ、残るは、かたミをうく、これ一首のくさりなり、

藤原忠房

きりくすいたくな鳴きを秋の夜の永き思ひは我を勝れる

秋をかなしみて、きりくすもなく、我もなく、なくに、かはりはなければ、思ひにおどりまさりあり、これを、ことわるなり、はもじ、ぞもじ、一字千金なり、ながき思ひにも、色々あり、故にはもじをたきて、わかちしなり、きりくすよりも、我一段まさ

れりといふ意ゆるどもじをおきて、重きを我に歸せしなり、例の聲さく時ぞ秋は  
かなしきといふ歌の、どもじはもじと同一格なり、味ふべし、これを詩にうつせば、  
暗蛩莫苦吟、秋思我尤永、といふべきにや、どもじは、この尤の字にあたる、その啼き  
を止むるは、なけば、いよく、永き思のまさればなり、

光明峯寺入道前攝政左大臣

年經ぬるよとの繼橋夢にたにわたらぬ中と絶ぬやうてなむ

淀の繼橋は、津國の名所なり、中とは、多くは、夫婦の中をいふなり、夫婦の約して、久  
しくあはぬより、その中のたえもやせん、と歎きけるを、年をへぬるよとの繼橋の  
朽はてゝ、わたられぬやうに、なりけるに、たとへて、いひけるなり、つぎ橋といふも、  
面白し、夫婦は、他人と他人とのつぎあはせにて、兩方よりつぎあはせたる橋ので  
とし、故にこれをひけるなり、つぎはしといひ、わたられぬといひ、中といひ、絶ゆとい  
ふ、いづれも、夫婦の縁語なり、その蟬聯して下るを味ふべし、たには、上に解せるこ  
とく、夢の中になりとも、あへばなぐさむべきを、それさへ叶ひがたしとの意なり、

馬内侍

ちやふる加茂の社の神もさけ君忘れすはわれも忘れし

ちはやふるとは、いちはやぶるといふ詞のつまりたるなり、ふるは、荒ふるのふる  
なり、武勇にてます神の形容詞なり、わが邦の神々は、何れも武勇にましませは、神  
の冠詞には、いつもこの詞を用ふるなり、まかせ給へといふべきなれども、歌なれ

ば、きけといふなり、君忘れずば、われも忘れじとは、甚いひがひなし、かゝるいひがひなき人ならば、君忘れなば、我も忘れんといふべし、君、君たらずとも、臣々たらざるべからず、といはずや、これらは、風教の益にならぬ歌なり、何ぞえらびいづるにたらん、かゝる歌よみて、加茂の神の納受し給はんとおもひしにや、道をまらざれば、かやうの歌も、よみいづるものなり、後進の徒、心得おくべし、右の句、君わするとも、我は忘れじと改めておきたし、

山階入道前左大臣

ひさかたのあま照る月の桂川秋のこよひの名に流れつゝ  
月の桂といふを、山城の桂川にいひかけたり、月の桂のかげうつりて、川のけしきのおもしろさ、殊に桂川も秋のものなかの月のかつらの名に、むかしより流れ來たる名所なれば、一段の致景よとなり、つゝ、ながれくゝて來たる名所なりといふを、省きてとめたるなり、

覺延法師

住吉の、松の、あらしも、かすむなり、遠里小野の、春の、あけは、の

遠里小野は、住吉につゝきたる所なりとぞ、春のあけばのは、何もかもかすむゆゑ、あらしもかすむといへるなり、どもじの用ひやう、心うへし、かすむの詞を承けて、遠里を出たし、遠里の地名にて、春曙遠里のけしきを見せたる手際、巧みなり、殊に歌の調、さらくゝとよみくだして、その景、月にあり、初學ひの人は、まづこのやうの

体を學ぶへきなり

平親清女

どにかくに憂きは此世のならひをと思へば身をも恨みやする

この歌ハ女ながらも悟道の歌なりとやかくおもふ時この歌をうちすせば一服の清涼散にやあたりぬべき身をもといひけるは人に對してなり人をも身をもうらみざらましといふ心と同じやはと重くかゝる故反語となるなりうらみやはするうらみはせぬとなり

平維貞

橘の匂ひをさそふ夕風に忍ぶむろしを遠さかりゆく  
いせ物語にさつきまつ花橘の香をかげばむかしの人の袖のかぞすると見えて  
むかしを忍ぶ故事とはなれるゆるこの歌もさる方にいへるなり夕風にさそは  
れて匂ひの遠さかりゆくがごとく忍ぶむろしを遠ざらゆくとなり一言にて  
兩意をいふ歌の妙處なり來る者は日に親み去る者は日に疎しとかやとかく人  
情といふものはこの境を出てがたしこの歌三復して戒とすべきなり

入道贈一品親王尊圓

いくたひも書きこそやらめ水莖の岡の萱原なひくはかりに  
これは戀の歌にていくたひも水莖の文をかきこそやらめ水莖の岡のかや原の  
風になびくやうにたのが方へなびくばかりにどの意なり水莖岡は江州の名所

なり、水莖とは、水中の草の莖をいふ、筆を水莖といふは、硯のうみにひたすは、水草の白莖を水中にひたせるに似たれは、いふなるべし、この歌も戀の歌なれども、立志の教にもすべし、それ、尊圓親王の書に、支那の王義之を、あけくれ學ばせ給ひて、さて後一派の和流て、ふ書法をたて給ひ、それより無数の法門ひらけて、假名かくものは、かや原の風になびくがごとく、御家流に、またがはぬものゝなきやうになれりしは、豈親王のいくたびとなく、水莖を聞して、かきやり給ひし功に、あらずや、されば、この御歌は、やがて親王の自道とも申すべきにや、

## 藻壁門院少將

おのか音につらきわかれのありとたに思ひもしらて鳥や鳴らん

おのが音ハ、鶏の方につきていふなり、ありのうへに、人の字を加へて見るべし、思ひものもは、感詞なり、思ひしらでマアといふマアにあたるなり、鶏なけば、男女互に別れゆく、そのつらさをしらでとなり、今の世にも、かゝる歌よみて、あかつきの別れをつらくおもふものもあるべし、た又、たのか音に目さめぬ人のありとたに思ひもえらて鳥や鳴らん、と朝ねする懶惰生もあるべく、おのか音にあかつき急く我どしも思ひえりてや鳥のなくらん、とふるひおくる人もあるべし、たのくその情のありのままをよめるが歌なり、心あるものは、いで教としつへく、いで戒としつべし、

## 藤原重頼女

逢ふ事はれもひ絶ぬるあかつきもわかれし鳥の音にぞ泣かるゝ  
再ひあふ事は、おもひ絶えぬるあかつきもわかれし時の鳥の音に、今も泣かるゝ  
となり、男女の戀の情のみならず、男子も千載の一遇、一たび去りて、再びあひがた  
き、その時の事をれもひ出づれば、此の情抑へがたからん、音になくといひ、音をの  
こどなくといふなどは、皆音を立てゝ鳴く、音にたてゝのみ鳴くといふを、省きた  
るなり、こゝも、音にたてゝ泣かるゝといふを、鳥の音にいひかけゝるなり、あかつ  
きものものは、わかるゝ時泣きしに對してなり、

(未完)

## 吊丸山少尉

并序

在文科大學 秋月胤繼

明治二十八年五月、王師討臺賊、賊勢猖獗、乃命第二師團赴援之。師團以十月十日、  
上陸番仔崙、翌十一日激戰于加冬脚。余再從弟丸山少尉奮戰死之。

蠢彼小醜一何頑。黑旗成隊擁雄關。王師精銳雖無比。持久屯在瘴霧間。廟堂赫然決大策。  
一舉將殲此舛逆。嚴令下第二師團。東北健兒稱無敵。時維孟冬旬日晨。天兵方下番仔崙。  
仔崙東去加冬脚。此是臺東三面門。虜不扼我於濱海。可知要衝守亦怠。乃派中隊略其城。  
不料頑兵邀我待。城臨渺々曠野中。易於守兮難於攻。上官已下進擊令。何問地勢通與窮。  
隊長一呼分二隊。先命前半衝賊塞。塞前扼我二重濠。堰水濠內爲妨礙。健兒見之太激昂。  
奮然躍入濠。一方何圖水底乃深泥。全沒胸腹及其吭。身膠泥中不得出。精兵雖猛施無術。  
壘上亂射彈。雨飛猛士空斃一又二。後半一隊怒赫兮。吶喊赴援似虎犀。喊聲忽止是何事。